

(1) スモン患者さんの社会生活に関する今年度報告

—福祉・介護サービスの受給状況—

田中千枝子（日本福祉大学）

二本柳 覚（京都文教大学）

研究要旨

2021年度の福祉・介護グループでは、以下3つの研究活動と、制度・社会資源のデータ更新作業、スモンの集いにおける対談企画を行った。研究では（1）スモン患者さんの社会生活に関する今年度報告（2）スモン患者の施設入所プロセスと多職種連携の在り方に関する事例研究（3）当事者の声を社会に届ける研究—若年スモン患者に焦点をあてて—である。

（1）コロナ禍2年目になりさらに高齢化・要介護状況の低下が進む中で、介護・福祉サービスの質の低下が心配されるところ、統計上気がかりな～3点について検討した。最近5年間の療養状況が、従来「在宅（7割強）」「時々入院（2割）」「長期入院入所（1割）」であった3様のうち、「時々入院入所」が2割1割強になり、「在宅」が7割を切ってきた。時々入院の中間期間が無くなり、在宅から即長期入院・施設になった可能性がある。世帯形態と主な介護者の変化では、単身世帯と老々介護の2人世帯が24年前には5割であったものが、現在では74.7%と4分の3を占めるようになった。それに伴い主な介護者は、フォーマルな専門介護職が4割となり、当事者と介護・福祉サービスの関係に意思決定支援などの課題がより重要になってきた。スモン患者さんの介護保険の認定率と要介護度の全介護保険利用者との比較では、介護保険認定率はスモン患者さんの方が高い（6割越え）にも関わらず、要介護度は重度4～5でみると、介護保険全体では21.2%のところ、スモン患者さんは15.1%軽度の要支援1～2では、全体が28.1%に対してスモン患者さんは32.4%であった。これらのことから、従来から言われているように、スモン患者さんの申請・認定率は全般に比べて高いものの、介護度の認定が軽く出ている可能性がある。そのため利用できる介護保険のサービスの枠と内容が、スモン患者さんのニーズに合わずに、介護保険のサービス利用が円滑にならないのではないかという可能性がある。

A. 研究目的

スモン患者さんが社会生活を行う上で使われるサービスの受給状況を把握することを中心に、家族を含めた患者さんのQOL向上に資する、社会サービス利用促進に至る方策を探るための知見を得ることを目的にする。

B. 研究方法

本年度の介護・福祉関連の調査データから当事者の許可を得た429名分を、24年間のデータと比較し、その推移と割合の変化から、スモン患者さんにとって介護・福祉サービス受給の促進における課題を検討する。

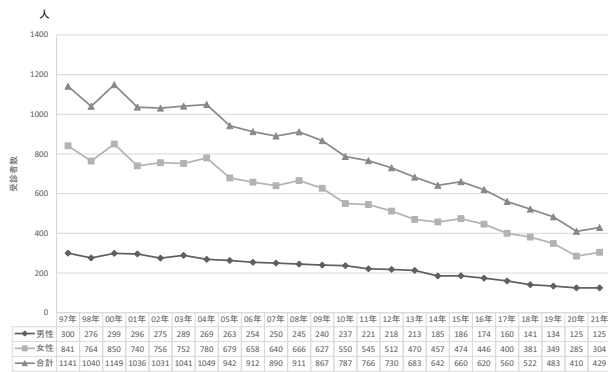


図1 受診者数の推移 (1997～2021年)

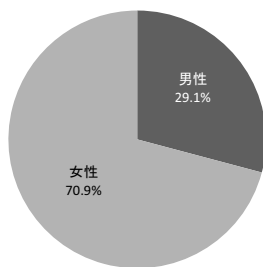


図2 2021年度性別

C. 研究結果

1) 概況

全体数は2000年の1,149名をピークに漸減しており、昨年度は410名となったが、今年度は429名とやや増加した。(図1)数年前より男性が3割を切っていたが、昨年・本年度は女性が少なかったため相対的に3割近くに戻った(図2)65～74歳以下、75-84歳の年齢層がそれぞれ約2ポイント程度の減、85才以上が5ポイントと昨年に比べ大幅に増加に転じた。(図3)。

2) 介護程度と療養状況・場所

また介護程度は介護の必要がないものが4割あったものが、昨年度は33.6%に急減しており85歳以上が増加した本年度は、本年度は常時の介護が必要なものが3ポイント増加している。一昨年度介護が毎日必要は3割に達し、また介護者が必要であるが不在がここ数年数%程度で常時生じている。増加する要介護者の生活環境の確保が重要になる(図4)。

またここ5年間の療養状況では在宅が7割、時々入院が2割、長期入院入所が1割となっていた(図5)。一昨年に在宅が7割を切り67.8%となったのに対し、本年度は2.3ポイント上昇している。一方で時々入院

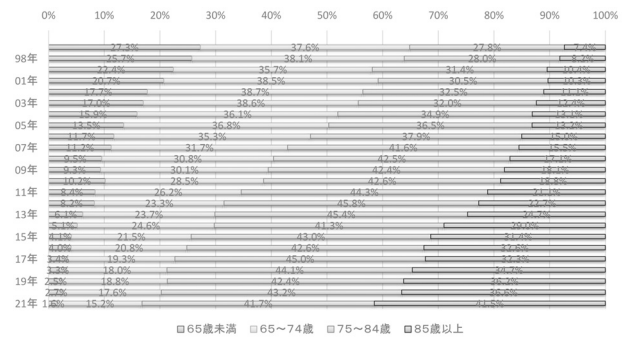


図3 年齢の推移

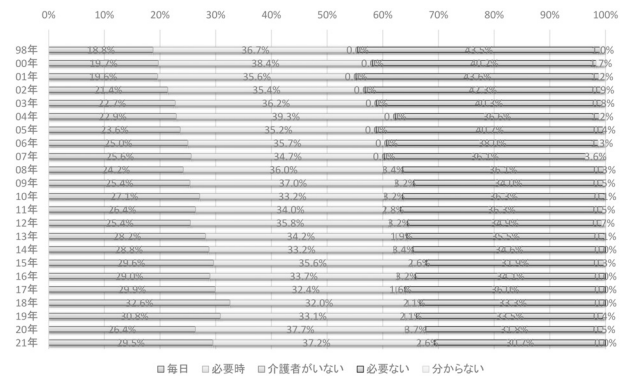


図4 要介護の状況推移

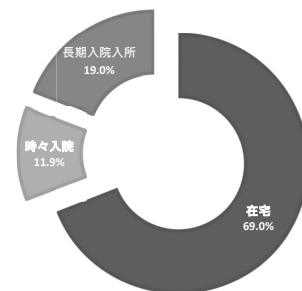


図5 最近5年間の療養状況

が16.2%から一昨年11.2%昨年12.8%と3年間で5ポイントの減となり、長期入院・入所が一昨年で3.7ポイント増加し19.7%となり、本年は19.0%となった。このことは生活の場が「在宅」と「時々入院」で生活していたところが、在宅から即長期入院入所へ移行している傾向を示しているのではないだろうかと考えられた。

3) 社会活動 日常の活動性

社会的活動は時々または毎日でも外出をする群が、20年前には7割あったが49.6%まで減少している。逆に1日を寝具上で過ごす群は7.6%から本年17.0%



図6 日常の活動性の推移

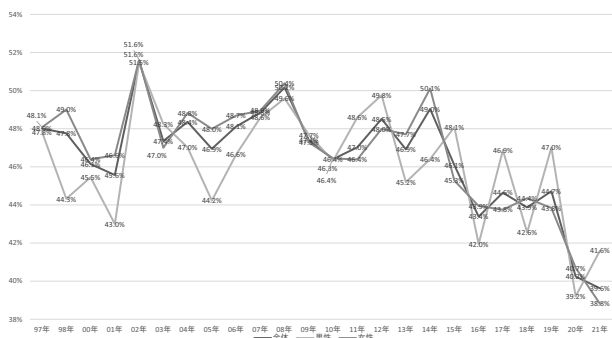


図7 満足度の推移

に増加している（図6）。くらしの満足度は4割～5割の幅で安定していたがここ数年は4割の下方に定着していたところ、一昨年は40%ぎりぎりコロナ禍による社会不安が大きく影響していると考えられた。本年度では男性は41.6%に回復したが、女性は38.8%とより低下した。（図7）。

4）家族と介護状況

世帯形態は24年間で単身と2人世帯で5割から昨年度74.7%と7割台の上方となった。とくに単身世帯は一昨年初めて43.2%と4割を超えた（図8）。また主な介護者は昨年度16年間で配偶者が45.7%から23.0%と漸減し、代わって公的専門職であるヘルパー（16.9%）や施設職員（22.7%）とで39.6%となることが特筆された（図9、図10）。今後は専門職に介護されている要介護の在宅療養のみならず、長期入院入所者の現状と課題を把握する必要があると考えられる。

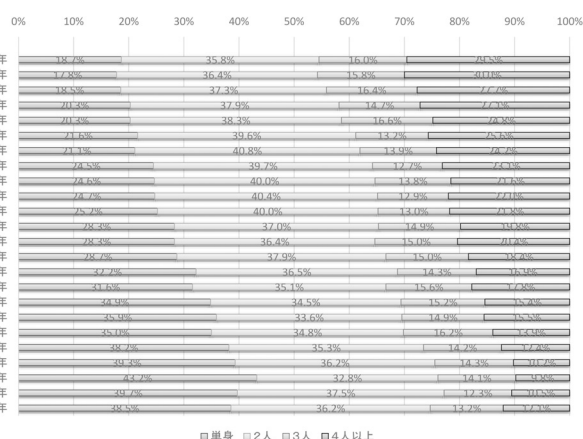


図8 世帯人数推移

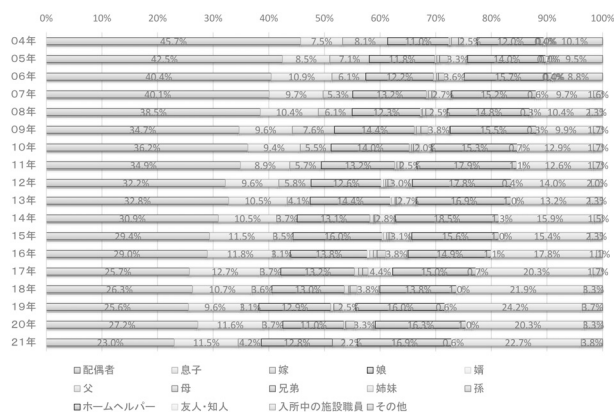


図9 主な介護者推移

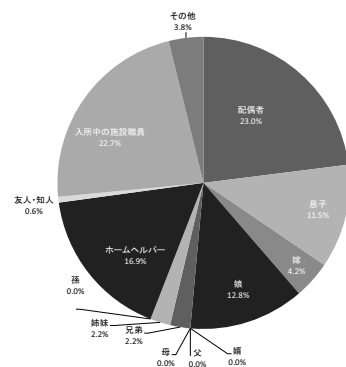


図10 2021年度の主な介護者

5）身体障害者手帳と介護保険 高齢者全体との比較

身体障害者手帳の所持率は例年9割を上回っていたところ一昨年度で87.4と9割を切った。本年は90.4%となっている（図11）。等級は1～2級の重度障害が一昨年度は56.5%であったが、今年度は51.1%である。介護保険の申請率は当初の2～3割からここ15年間は5割をキープしていたが、昨年度58.7%と漸増

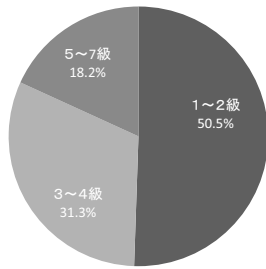


図 11 身体障害者手帳取得者

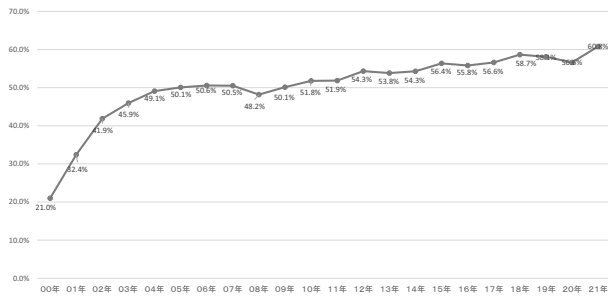


図 12 介護保険申請認定者推移

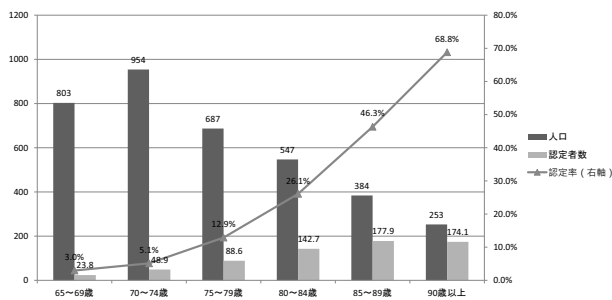


図 13 高齢者人口と要介護認定率

令和元年度介護保険事業状況報告
2021 年人口推計（3 月報）より作成

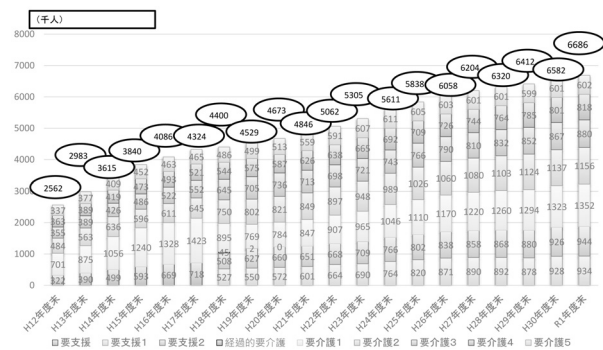


図 14 要介護度別認定者数の推移

出典：介護保険事業状況報告 令和元年度

していた。本年度は 60.8% となり、申請率が 6 割に乗った（図 12）。

一方日本全体の高齢者人口と要介護認定率では 85 歳以上が 56.7% を占めている（図 13）。全高齢者の要



図 15 要介護度の推移

介護度については 4 ~ 5 の重度が 16.9% となっている（図 14）。それに対してスモン患者の要支援 1 ~ 2 は 30.7% であり、4 ~ 5 は 19.5% であり、スモン患者の障害程度が軽く認定される可能性の傾向が続いている（図 15）。今後介護保険での要介護軽度の施設入所が制限される中で、要介護度認定の改善に向けて注目していく必要がある。

6) 介護・福祉サービス受給状況

介護保険ではホームヘルプ現在使っているが、一昨年度 59.4% に対して今年度は 53.7% と 5.7 ポイント減



図 16 介護保険サービス利用経験（在宅・通所系）

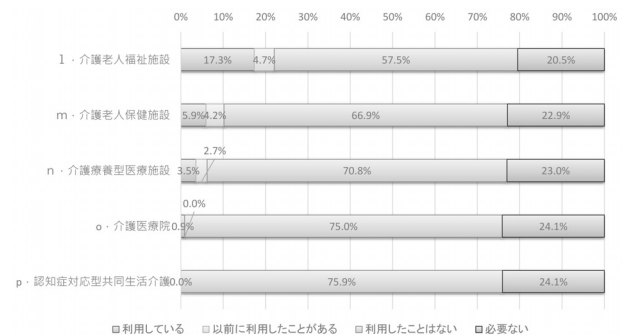


図 17 介護保険サービス利用経験（入所系）

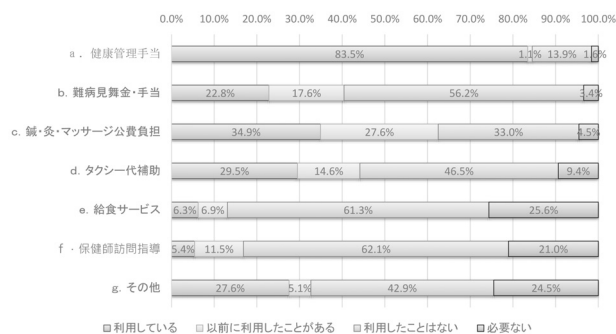


図 18 福祉サービス利用の経験

が特筆される。通所系サービスではデイサービスが41.5%（一昨年度48.8%）、通所リハビリが41.3%（一昨年度41.1%）と減少している。コロナの影響による利用抑制がある可能性がある（図16）。また介護保険による入所施設利用は特養ホームで3年前にはじめて10%を越えて、一昨年度15.6%昨年度14.0%、今年度19.0%となっている（図17）。またスモン関連制度は管理手当8割、鍼灸公費負担は以前利用も含めて62.5%（一昨年度59.2%）と高率である（図18）。

7) 問題関心領域の変遷

また問題関心領域では医学的問題は20年前に3割だったものが5割になった。その上昇につれて家族や介護の問題をさらに大きくしていると考えられる。家族や介護問題2割、福祉サービス問題7～8%、住居・経済問題6～7%と割合としては変化の内容は個別性の高いものであるため、量的対応よりも個別対応への力を必要とする考える（図19）。

D. 考察

以上の状況から、以下3つのことについて課題を設定した。

最近5年間の療養状況が、従来「在宅（7割強）」「時々入院（2割）」「長期入院入所（1割）」であった3様のうち、「時々入院入所」が2割1割強になり、「在宅」が7割を切ってきた。時々入院の中間期間が無く、在宅から即長期入院・施設になった可能性がある。

世帯形態と主な介護者の変化では、単身世帯と老々介護の2人世帯が24年前には5割であったものが、

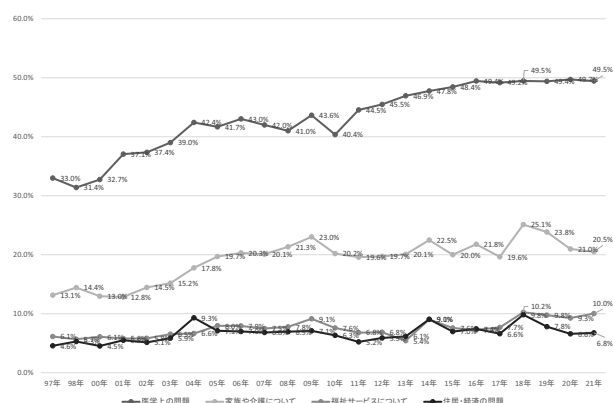


図 19 問題領域の推移

現在では74.7%と4分の3を占めるようになった。それに伴い主な介護者は、フォーマルな専門介護職が4割となり、当事者と介護・福祉サービスの関係に意思決定支援などの課題がより重要になってきた。

スモン患者さんの介護保険の認定率と要介護度の全介護保険利用者との比較では、介護保険認定率はスモン患者さんの方が高い（6割越え）にも関わらず、要介護度は重度4～5でみると、介護保険全体では21.2%のところ、スモン患者さんは15.1%軽度の要支援1～2では、全体が28.1%に対してスモン患者さんは32.4%であった。これらのことから、スモン患者さんの申請・認定率は高いものの、要介護度認定が軽く出ている可能性がある。そのため利用できる介護保険のサービスの枠と内容が、スモン患者さんのニーズに合わずに、介護保険のサービス利用が円滑にならないのではないかとこの可能性がある。

E. 結論

これらの結果から、今後の研究展望を行った。

在宅から入院入所へのソフトランディングの方法の模索

時々入院入所・レスパイト入院などの中間期間やそのプロセスを保証するケアとしての地域連携の質の確保

増加しているフォーマルな介護者への啓発的対応

そして具体的な本年度研究として

1) スモン患者の施設入所プロセスと多職種連携の

在り方に関する事例研究

2) 当事者の声を社会に届ける研究—若年スモン患者に焦点を当てて 実施した。

G. 研究発表

1. 論文発表

1) 二本柳 覚, 「若年スモン患者の生活と課題に関するアンケート調査」 京都文教大学臨床心理学部研究報告 2021 年

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし